

No.11

中国人民の消費生活を支えた
耐久消費財の普及状況

1999年7月

椛山女学園大学生生活科学部
横田 澄司

中国人民の消費生活を支えた耐久消費財の普及状況

横田 澄司

はじめに

中華人民共和国の消費生活は、1949年建設以来、現在まで、二つの時代区分をするのが、一般的である。すなわち、1949年から1978年までの毛沢東時代と1979年以後の鄧小平時代である。この両時代は、毛沢東と鄧小平の両指導者による政策上の違いから、多くの点で、国民生活に及ぼした影響力は、類似点より差異点が指摘されている。特に、耐久消費財の普及状況に注目すれば、後述のように、経済発展と共に、中国の豊かな消費生活の現出が理解される。ただし、1990年以後の消費生活は、先の二つの時代区分の消費動向とまた異なり、海外からの小売店進出や海外の文化情報により、消費者の購買意識も高まり、中国の過去にない、空前の豊かな消費生活に導くことになる。

いずれにせよ、消費構造についての系統的な調査、研究が行われたのは、1979年以後のことである¹⁾とされ、それ以前はずっと戦争状態が続いたため、完備した調査資料も残っていない、と言うことである。

本研究では、中国人民が、耐久消費財の購買をめぐる、どのような生活観が形成され、将来、どのような生活様式を営み、どのような社会の出現をのぞむのか、である。

主として、毛沢東の時代と鄧小平の時代、さらには1990年代の時代の3区分による比較検討を行うものである。

毛沢東の時代における耐久消費財の普及

毛沢東の時代と鄧小平の時代の二つを比較すると、毛沢東の時代は、社会主義建設の計画の時代であり、基本的には中国社会は、閉鎖システムの中にあっただと言える。この時期、中国特有の「重工業優先開発戦略」にみとづく工業建設が行われ、ともかく増産、生産性向上が重視された時代であった²⁾。

そのため、一般大衆の消費生活は軽視され、低賃金、低物価、低消費の「三低時代」と称された。換言すれば、人民への奉仕、社会主義祖国への貢献など、理想主義的傾向の強いのが、特徴であった。ただ当時、平等分配の下では、「働いても、怠けても、分配が同

1) 李大雁、「中国の都市における食品消費構造の歴史的推移および予測」

明治大学「経営論集」, 第38巻, 第1号, 1991年, 214頁

2) 山内一男、「中国経済近代化への模索より展望 —— 建国後40年の軌跡」

(山内一男編著「中国経済の転換」, 第2巻, 岩波書店, 1988年, 4頁)

じであるならば、なるべく働かない」が、多くの中国人民の意識であった。そのため、怠慢がはびこり、反対に逆差別の風潮を生み出す結果となった。さらに、基本的な消費財の配給下では、「闇経済」が公然と存在することになる³⁾。

毛沢東の時代の「社会主義消費観」は、実は刻苦奮闘、勤儉節約、節衣縮食をモットーとして、とにかく新国家建設のために、衣食さえ犠牲にすることは当然である、と強調した。これは、中華人民共和国建設以来の伝統的な消費観であった。例えば、毛沢東は1956年4月25日の政治局拡大会議で、「一窮二白」について講話をしている。中国は、経済的に貧しく、文化的に立ち遅れているが、「貧窮であれば、革命を起こす」「科学技術水準の高い国は、奢り高ぶる」として、中国人民の貧しいことは、むしろよいことである、将来への発展の可能性を秘めているとした⁴⁾。計画経済、平等分配、節衣縮食、刻苦奮闘、など、いずれも社会主義思想の基本をなすものであるが、そして、この枠組みの中で、中国の耐久消費財生産、およびその消費が規制されることになる。

しかしながら、1949年から1978年までの約30年間と言うものは、中国人民の間では、「4大件」と言って腕時計、自転車、ミシン、ラジオの4品目が、特に人気の耐久消費財として、関心を集めた。中でも腕時計、自転車、ミシンの3品目は、少なくとも当時の中国人民にとって、「3種神器」と呼ばれ、何とか入手したい、と言う欲望を掻き立てることになる。しかし現実には、厳しく「神器」と言われるように、当時の中国人民にとって、誰もが容易に入手できる商品ではなかった。1949年から30年間のうち、毛沢東が支配した中国での耐久消費財の内容は、きわめて貧しいものであった。

まず50年代、生活必需品としての家具類、「机」「椅子」「筆筒」が、基本であった。「机」「椅子」は、家族の食事を始め、何か書き物をするとき、また来客のときの茶台として、利用された。そのため中国人民は、直接、床に座して食事をすることは、殆どなかった。「筆筒」は、衣類の他、貴重品を収納するために、必要であった。ときには贅沢品として、「腕時計」に注目されたが、この時期、一般の中国人民にとって、入手困難な商品であった。時刻を知るよりも、宝飾品であった。

いずれにせよ、中国は国作りのために、そして社会主義体制を確立するためにも、消費生活面で、多くの犠牲を強いたことは確かである⁵⁾。

例えば、1949年の中国の国内生産数量に注目しても理解されるが、自転車1.4万台、腕時計0、ミシン0、ラジオ4千台、といった状況であった⁶⁾。

3) 「中国、耐久消費財の動向と展望」、月刊中国経済、1988年1月号

16-24頁

4) 中野謙二、「キーワードで見る中国50年」、大修館書店、1999年

31-32頁

5) 歴以宁、「消費経済学」、人民出版社、1984年、143頁

6) 「中国統計年鑑、75年度版」、中国統計出版社、12頁

つまり国家レベルでは信じられないように、腕時計やミシンが、この時期中国では、生産されていなかった。この種の生産を行うには、まだ十分生産体制が整っていなかったことが理解される。60年代からは、「ラジオ」が耐久消費財として、一般家庭に徐々に普及し始めた。中国政府も、「ラジオ」の普及が、中国人民に対する教宣活動に重要と位置づけていた。また中国人民の方も、変動の激しい時代、国内の情報は、安穩の生活のために必要とした。言うまでもなく、当時のラジオ番組には、娯楽的な内容のものは、一切放送されなかった。60年代には、「自転車」は交通手段として、また生活必需品として利用され始め、貴重品ではあったが、入手したい願望は、誰もが強くもっていた。

特に、交通機関が十分整備されていないため、自転車は中国人民にとって、欠くことができない重要な交通手段であった。広い道路一杯に、自転車に乗った人民の大群の写真が、この時期しばしば紹介されたが、60年代の前半に、その萌芽がみられる。つまり40年代後半から50年度前半と比較すると、著しい消費生活面での向上が指摘される。

例えば、先の「中国統計年鑑、75年度版」によれば、1960年の国内生産として、自転車176.5万台、腕時計50.5万個、ミシン88万台、ラジオ158.7万台と増産しているのが、理解される⁷⁾。

いずれにせよ、毛沢東の時代は、中国において、耐久消費財の普及は、中国の人口から判断して不十分である。つまり政治的な要因により、生産面で遅れを取ることになる。

50年代は、1950年6月25日に朝鮮動乱が勃発するが、建国から一年も経過しない時期、中国は新たな試練に直面する。朝鮮戦争への参戦で、中国人民志願軍は、戦闘だけで死傷者が、何と36万6000人もの犠牲を払うことになる。

このときの中国政府の取った政策「抗美援朝、保家衛國」、つまり「アメリカに徹底抗戦し、北朝鮮に可能な限り援助する、そして家と国を守ろう」と言う方針で、中国人民は節衣縮食に徹し、むしろ軍事工業を発展させ、武器、兵力、食糧などを、北朝鮮に積極的な支援している⁸⁾。このため、中国人民の耐久消費財の生産および市場は、完全に、「停滞の時期」を過ごすことになる。

さらに60年代から70年代の間、中国政府内部で、「十年動乱」と言う激しい政治闘争が展開される。これもまた、中国経済の発展にきわめて悪い影響を与えることになる。中国人民は、20年もの間、毛沢東時代に関心のもたれた「4大件」の耐久消費財を、充足されないまま、不便な生活状態が継続されて行く。

ところで、この20年間、中国が耐乏生活を余儀なくされている時、逆に日本は戦後の困難期を克服して、技術革新を巧みに取り入れ、高度経済成長を經由して、高度な大衆消費時代を現出させる。この期の停滞が、中国を日本との著しい格差を生み出し、大きく日本とのハンディを担うことになる。

7) 「中国統計年鑑、75年度版」、中国統計出版社、13頁

8) 中野謙二、前掲書、大修館書店、1999年、7頁

文化大革命下による消費動向

「大躍進」と言う人民公社路線の強行により、大きな損害を受けた中国国民経済は、一定期間の調整政策を実施することにより、ある程度の回復をみる事ができた⁹⁾。

しかしそれも束の間、1966年より文化大革命により、再度激動期に入る。特に、文革の激しかったのは、67年、68年の2年間とされている。つまり、造反派労働者の活動、さらには大規模な武闘により、工場の生産が極度に低下、紅衛兵の全国的な移動によって交通輸送がマヒ、そのため石炭、石油、木材、食糧など、重要物資の輸送ができず、工場と生産と人民生活が大きな打撃を受けることになる。

さらに企業における労働者の規律は乱れ、出勤率と労働効率は著しく低下した。一例を挙げると、67年1、2月の全国の炭鉱における出勤率は、通常の50-60%程度に落ち込む。その結果、67年の工農業生産総額は、前年比10%減、68年には前年比4.2%減となる。そのうち、農業総生産額は、67年には前年よりやや増加を示すが、68年には前年比2.5%減、工業総生産額では67年には前年比14%減、68年には同じく前年比5%減であった、とされている。

以上のような状態であるため、人民が消費生活面でも豊かさを追求する風潮にないことは、明らかであった。むしろ思想的にぜいたくの享受は、許されるものではなかった。

ただ注目すべき点は、文革の渦中、他の耐久消費財と異なり、以下のようにラジオの普及が増大傾向を示している（生産数、万台）。

61年	62.0,	62年	90.3,	63年	80.9,
64年	78.3,	65年	81.5,	66年	83.7,
67年	資料なし,	68年	117.6	69年	資料なし
70年	323.1				

上記の数値は、当時の世相を反映したものである¹⁰⁾。

67年は、中国人民にとって、もっとも激しい文革のピーク時で、ラジオを通して革命の状況を知りたかったように思われる。しかし70年には文革も終息し、消費生活に落ち着きを取り戻す。中国文化大革命の終わり（狭義には、1969年まで、広義には、1976年の四人組の逮捕で収束）により、新しい時代の到来を意味する。キッシンジャーとニクソンの訪中から始まる米中関係の改善、国連での議席回復など、まず国際政治の面が先行しながら、80年代には、経済を含めた開放システムの方向が、明示される。

毛沢東時代には、閉鎖システムの中で、中国は大躍進期、文化大革命期のように、左への傾斜がみられ、全体に左右の振幅が大きかったが、鄧小平時代には、開放システムの中で国際政治、経済面での関係構築を断行して行くことにより、これまでの硬直化した消費生活も、徐々に開放されて行くことになる。

9) 「中国統計年鑑」、1991年度版、中国統計出版社、32-33頁

10) 「中国統計年鑑」、1975年度版、中国統計出版社、15頁

鄧小平時代における耐久消費財の普及

1978年12月の中国共産党第11期3中総会を起点として、鄧小平時代となる。鄧小平の出現により、経済改革が積極的に促進され、かれの没後も、それが継続される。つまり「社会主義市場経済」への移行時代と言える。そのために、「多種の経済構成要素の共存、多種の経営方式の共存、多くの流通ルートと少ない流通段階と言うく三多一少」の流通形態を確立された。また「改革開放の初期、中国の流通分野各部門は、人民生活レベルの向上と経済建設の急需を満たすため、適当量のカラーテレビ、冷蔵庫、洗濯機などの消費財と鋼材、自動車、機械、電子設備などの生産財を輸入」したとある。つまり、政府主導型の耐久消費財の需要喚起により、中国人民は80年代には大幅な購買行動に踏み切ることになる¹¹⁾。

1984年10月20日、中国共産党中央委員会は、一週間に及ぶ総会の後、はっきりと個人消費を刺激するため、「外国の製品を購入してもよい」と言う前例のない自由を個人と企業の両方に与える。これは市場経済に移行するために、まず価格メカニズムを導入すると言うのが狙いであった。そのため建国以来、初めての消費ブームに突入することになる。個人レベルで、テレビ、洗濯機、冷蔵庫、テープレコーダーを買い、職場や国営企業、地方政府や町村レベルでは、自動車、トラック、ビデオカセット、大型のカラーテレビなどが購入された¹²⁾。

しかしこの年、日本からの輸出が前年を47%も上回り、85年にはさらにそれから71%も増加を示す。その結果、

84年、日中貿易総額 132億ドル、中国の対日貿易赤字 20億ドル

85年、日中貿易総額 189億ドル、中国の対日貿易赤字 59億ドル

となり¹³⁾、従来より低価格の日本製品が、大量に出回るようになる。

以上の対日貿易赤字から理解されるように、「消費騒乱」の事態を招く結果となり、中国政府は1985年から、むしろ消費熱を抑制する対策を採るようになる。それが、1990年代初頭の「消費低迷」の時代である。ただ80年代前後は、「何のために生産するのか」、という社会主義生産の目的論争が再度発生するが、結果的に、古い社会主義の消費観を批判して、自らを解放することの必要性を強調するようになる。さらに「大衆の日に増大する物質的、文化的ニーズを充足させるため」に、かれらの必要とする製品を生産する。すなわち、「消費のための生産」という当然の結論に帰着する。驚くことに、「大衆の物質的、文化的、消費生活の必要を満たすことが、社会主義国家としての生産目的

11) 中国政府外交部編「商品流通分野の対外開放」新星出版社、1998年、1頁

12) ジム・マン(田畑光永訳)「北京ジープ」、ジャパン・タイムズ、1990年
171-172頁

13) ジム・マン(田畑光永訳) 同上書 181頁

である」と言う結論に到達することになる。つまり中国人民は、これまでの耐乏生活から徐々に消費への関心を喚起する方向へと向けられる。そのため生産第一主義の束縛から解放され、「消費の肯定」にたどりつくまでに、新中国建設後、30年も要することになる。

特に、1984年には政府が都市経済改革に着手するため、中央集権経済からの脱却が、重要として、各地域の職場での自由意思にもとづく購買が、一層促進されることになる。

それで、政治的要因によって、80年代以後、耐久消費財の構造は大きな変化を示し、主として家電製品中心の時代に入ることになる。つまり、「新4大件」（テレビ、冷蔵庫、洗濯機、ラジオカセット）は、一般家庭の基本的な耐久消費財として、強い関心が示され、受け入れられるようになる。このように急激な近代化路線は、「社会主義生産の目的論争」以外に、鄧小平の「先富論」に負うところが、大きい。

ただ中国の場合、消費ブームが起きれば、人口規模が大きいだけに、狂乱状態に陥りやすい側面がある。さらに個人の場合と各機関、組織の場合の二つのルートがあるのは、よく知られている事実である。また実際に使用されている実態では、その公私の区別がつきにくいところがある。それだけに社会主義中国では、機関、組織の消費に対する役割は大きく、自由主義諸国の民間企業の果たす役割よりさらに大きいと言われる¹⁴⁾。つまり、個人で購入できない消費財は、組織で購入して個人が使用すると言うパターンである。

例えば、中国において、街路を走っている自動車は、実質的にほとんどが個人の所有ではなく、職場の所有物である。各職場が、その組織の指導者のために、一括して購入されて形式的には指導者や幹部用となっている。しかし指導者がときには使用しない場合、周囲の幹部やその家族が借用すると言うことが、しばしばある。そのため、購入の目的、理由に「組織の指導者のため」と言うことがあっても、実態は必ずしも特定の指導者のみのものではない、ことはよく知られている。

他の例として、テレビやビデオカセットなど、職場で購入された商品が、指導者や幹部の自宅に置かれ、その家族が自由に使用していることがある。そのため、外部の人間から見た場合、私有、公有の区別のつかないこともある。換言すれば、中国では私有のために、公的機関が利用されると言うことである。

さらに、他の例として、中国政府が外国製品の購買を奨励した1984年の年末には、職場が大量に仕入れて、ボーナスとして労働者に、食品、衣料の他に、ラジオや白黒テレビを配給すると言うことが、行われている。地域によっては、ズボン、靴、砂糖、石鹸など、耐久消費財に限定されず、日常必需品まで配布されることが珍しくない。

また経済特別区域（経済特区）では、海外からの輸入品に関税のかからない状態になっている。鄧小平の指導の下、改革のモデルとして範囲を限定して、中国本土より法人税を低くして、雇用や解雇の自由を大幅に認め、自由主義諸国からの企業誘致を計った。しかし現実には、ここでの商品を、中国本土に横流しや投機をはびこらせる結果となる。

14) 黄曉勇（中国社会科学院弁公庁）からの聴取調査(96.11.15.)，北京にて

50年代、60年代、70年代、80年代の消費生活

調査の概要

聴取調査は、孫穎（名古屋市立大学院生）の協力を得て、実施された。面接は、以下の3名により、1998年10月、北京市と瀋陽市で、同一人物であれ、昼食または夕食を挟んで、実施された。調査対象者は、つぎの通りである。

- 張 書賢氏（65歳）、北京市国有企業に勤務の元従事者、北京市在住
李 大飛氏（65歳）、瀋陽市人民政府に勤務の元公務員、瀋陽市在住
王 曉春氏（65歳）、鞍山市近郊の元人民公社農民、唐家房に在住

問題点の設定

1. 毛沢東の時代、一般の庶民は、どのような消費生活を過ごしていたのだろうか。
2. 例えば、50年代の典型的な庶民は、どのような耐久消費財を所有していたのか、またどのような消費観、生活観をもっていたのか。
3. 60年代、70年代、80年代と消費観、生活観の時系列的な変化はどうか。

国有企業に勤務する張氏の50年代

張書賢氏の場合、まず50年代はどうだろうか。事例を通して、検討を加えてみたい。

彼は、当時20代の若者で、大手製造業に勤務していた。月収は、人民元で39元であった。妻の龍小燕氏も同じ20代、町内の小さい工場に勤務し、月収は25人民元であった。まだ新婚で、子供がいない。夫婦は張氏の社宅に居住し、家賃は月1.5人民元を支払う。張氏は7人兄弟の長男であり、兄弟7人のうち、5人がまだ学生であった。そのため、実家へは毎月10元も送金していた、と当時を思い出す。

張氏夫婦の家には、耐久消費財として、机1台、椅子2脚、敷布團2セット、妻の龍氏は、腕時計1個、木箱（収納箱）1台であった。木箱については、張氏の両親が、結婚祝として、妻の龍氏にプレゼントしたものである。

しかし、当時は現在の多彩な家電製品について何一つ知らず、当時の簡素な生活が、普通のことと、特に不満も感じなかった、と言う。

夫婦の収入は、日常の生活に満足も不満足もなく、余った金銭はとにかく、貯金をした。当時夫婦にとって、もっとも必要とした耐久消費財は、「自転車」であったため、貯金をした。なぜなら、張氏は「毎日歩いて工場に行っています。片道でだいたい30分はかかります。大変です。それに妻はバスで毎週、実家に帰りますから、自転車があれば、その分貯金もできたはずです」と、当時を思い出しながら、話した。なお50年代は、「子供がいないから、夫婦で節約できるところはしよう、と話し合って、自転車を買うために努力する」と

言うのが、当時の合言葉であった、と言う。

以上から、理解されることは、貨金の低いこと、また最小限の家財道具の所有など、別に満足や不満も感じず、それが普通と言う考えにあった点に、注目される。そして自転車、唯一必要かつ貴重な耐久消費財として、当時は評価されていたことである。

国有企業に勤務する張氏の60年代

例えば60年代の場合、張氏の消費生活は、どのように変化したのかである。

張氏の一家は、長女、次女の二子が誕生して、4人家族になる。この間に、張氏の給与も約2倍になり、63.5元となる。妻の龍氏も、給与が39元と増加する。この時期になると、張氏の夢も実現され、28インチの国産自転車を購入することができる。さらに、男性用腕時計一個と筆筒一本と言うように、耐久消費財の所有も変化を示すようになる。「まだミシンもラジオもなかったが、やっと普通の生活ができるようになりました」と、微笑みながら回答した。そのため張氏は「これからも、欲しいものは夫婦でお金を貯めて、買います。つぎはラジオです」と、話すのであった。つまりラジオを通して、「いろいろな事を知りたい」と回答している。「小さな箱から、いろいろなことが聞こえてくるので、不思議だ」と、未だに不可解と言う気持ちでいる。

張氏の周囲も、中国の国内問題、海外の話題などについて、ラジオから聞いたと耳にするたびに、何としても購入したいと考えた。ラジオをもたないと、ますます周囲の人びとからは、取り残されると言う危機感すら感じたと言う。立派な共産黨員、立派な軍人、立派な労働者など、ラジオで紹介されることも気になり、ラジオを欲しくなったと言う。

例えば、「中国統計年鑑、91年度版」によれば、1949年の国内生産数としては、自転車 1.4万台、腕時計 0、ミシン 0、ラジオ 4千台、と言った数値が記されている。60年代からは、「ラジオ」が貴重な消費財として、一般家庭に徐々に普及するようになるが、49年当時では、僅か4千台しか生産されなかった。同時に当時「自転車」は交通手段として、また生活必需品としても貴重であった。そのため自転車は中国人民にとって、ラジオ同様、入手したい重要な耐久消費財であった。

1960年の国内生産として、先の商品も、一挙に増産されるようになる。

自転車 176.5万台、腕時計 50.5万個、ミシン 88万台、
ラジオ 158.7万台 と増大している。

いずれにせよ、毛沢東の時代は、中国で耐久消費財の普及は、政治的な要因により、生産が抑制され、中国人民に豊かな消費生活をもたらす生産体制は、確立されなかった。

60年代に入っても、自転車、ラジオ、ミシン、腕時計の4品は、どの中国人民に対しても、広く行き渡ることはなかった。また洗濯機や冷蔵庫などは、彼らに及びもつかない商品で、第一地域によっては、電気の架線すら掛けられている状態になかった。

国有企業に勤務する張氏の70年代

例えば、張氏の一家は、70年代の場合、それ以前と比較してさらに収入が増大することになり、豊かな消費生活を享受する。50年代や60年代で体験しない食生活、衣生活を楽しむことになる。

70年代になると、張氏の月収は、69.5元になる。また妻の龍氏も45元となり、食事には豚肉も食べるようになり、魚介類にも口にできるようになる。

ただ、4人家族の毛皮の衣服を購入するとすると、高価で簡単に購入できないが、二人の女の子も成長して、年頃の女性になると、彼女たちは、外出する機会も多くなり、何着も衣服を欲しがすが、欲しいからと何着も専門店で衣服を購入することはできなかった。

70年初期は、子供も家事の役に立ったが、収入を得る労働力としては期待できなかった。それでミシンを購入して、ミシンさえあれば、安い布地を購入して、家族全員の好みの衣服が作れると夫婦で話し合った。とにかく数年でこの目標を達成しようと努力し、計画を立てることにする。

その結果、70年代後半に、やっと宿願の上海製のブランド、「蜜蜂」ミシンを購入する。妻は、早速ミシンを動かして自分の衣服を作っていたのが、印象的である。同時に、思い切って南京製の有名ブランド「パンダ」ラジオも購入することにした。このときの感動は今も覚えていると話す。妻は、ラジオを聞きながら、ミシンを踏んでいたのを懐かしい思い出だと話す。

ラジオ「パンダ」とミシン「蜜蜂」は、いずれも中国では有名ブランドである。ラジオは張氏が専ら操作し、あれこれの番組に家族全員が耳を傾けた。ときには屋外でラジオを聴いたりもした。近所の人びとが集まって、一緒に聴くこともあった。ミシンは妻が一人、暇さえあれば動かしていた。長女も使用することがあったが、そのときは妻がいつも側にいて、あれこれ助言して、ほとんどの衣服は、ミシンで、作った。店で販売しているものより良かったと、妻の出来映えを誉めた。

いずれにせよ、ラジオとミシンの購入によって、家族全員が家庭の中で、時間を過ごすことが多くなったと言える。ただ次女が無断でラジオをいじって、張氏が厳しく叱ったこと、また次女が無断でミシンをいじって、指を怪我して大変だったことなど、も思い出すと言う。

確かに、張氏だけではミシンもラジオも共に購入は不可能であったが、妻の協力により、念願の商品を入手する。この70年代において、中国人であれば、誰もが、「4大件」と言う自転車、腕時計、ラジオ、ミシンを、張氏の家庭では、それぞれ1台、2個、1台、1台と言う具合に、手に入れることになる。

この調査時で、「80年代になって、つぎに欲しいものは何ですか」と質問すると、張氏は「テレビ」とはっきりと回答した。

張氏の80年代の消費生活は、さらに電化製品を中心とする耐久消費財の充実によって、大幅な変化がみられた。

国有企業に勤務する張氏の80年代

例えば、80年代の時期、張氏にとって大きな変化は、政府が労働者の賃金を、引き上げたこと、奨励制度の設置、出来高払い制が復活したことである。そのため張氏の工場も、労働者の働き具合により、「ボーナス」に格差をつけて支給されるようになる。

特に、ボーナスについては、労働者の生産した製品の加工数に応じて、その額が規定され、従来のように働いても働かなくても同額のボーナスと言うことはなくなる。

当然、張氏は多くのボーナスを獲得するため、可能な限り生産活動に従事する。その結果、張氏の家庭も、収入が増えて経済的に豊かになる。

ここに張氏の収入は急に増加して、月収は何と600人民元となる。同時に妻は月収200人民元になる。これは、70年代以前には考えられない金額であった。子供は既に就職しているが、子供は子供で、自分の給与はそれぞれ貯蓄に回していた。若干、家計の足しにと、入れてくれたりしたが、幼い頃と違い、食欲も旺盛で、少しくらい家計に入れても、プラスにはならなかった。

中国政府が、突然、70年代後半になって、積極的に外国製品、特に優れた日本製の家電製品の購入を勧めたことが、今もなお不思議だと言う。しかし張氏は、家庭でも職場でも、日本製の家電製品について、話題にされているのを知り、購買意欲が刺激される。家庭でも、しばしば妻との会話は、日本製の家電製品についてであった。友人たちも「購入するなら、割引する店をいつでも紹介する」と言ってくれた。

それだけに家庭用の耐久消費財の所有状況にも、大きな変化がみられた。つまり「家庭は、完全に電氣化した」と張氏が自慢するように、70年代には夢であったテレビ（白黒）、洗濯機、冷蔵庫、電気炊飯器、ラジカセ、を購入し生活を楽しむことになる。毛沢東の時代から、約20年の後、一気に生活水準が向上したことを嘯みしめる。毛沢東の時代、それほど貧しいと言う意識はなかったが、今にして思えば、「よくもあんな貧しい生活をしていたと思う」「中国も、立派に経済発展をした」と述懐した。

80年代の後半には、カラーテレビを購入、長女は、26インチの女性用自転車を購入、次女はマウンテンバイクを購入、そのため張氏の家庭では3台の自転車を、一度に保有する。4人の家族は、物質的には恵まれ豊かな生活を過ごしているため、妻は「この生活で満足だ、今は、もう欲しいものは何もない。この時期、必要なものは、すべて手に入れた」と話している。

以上、80年代になって、一挙に中国人民の生活は豊かになる。

市役所に勤務する李氏の50年代

先の国営工場に勤務する労働者と異なり、瀋陽市役所に勤務する公務員の場合はどうか、中国では権力をもつ公務員の生活を、耐久消費財との関わりで、検討したい。

50年代の生活を語るには、李大飛氏は30代初めの年齢であった。遼寧大学を卒業して、家族は専業主婦の妻（30代）と小学生の長女、長男と、次女、三女の6人家族であった。毛沢東時代、子供は多いほどよい、を信奉して、現在の一人っ子政策からは考えられない大家族である。しかし当時の李氏の月収は、何と56人民元であった。6人家族で生活するには大変で、「食べるだけで精一杯であった」と言葉少なげに語る。毛沢東を心から崇拜して、「不満を述べることはない、模範的な共産党員であった」と言う。むしろ「貧困に耐えることが、人間を強くする」と考えていた。

50年代の李氏一家は、耐久消費財としては、柱時計1台、机1脚、椅子4脚、学習用机椅子セット1台、それに李氏の腕時計である。

ただし腕時計は、市役所の上司からもらったと言う。時計をしていても、殆ど時間を見ることはなく、「ある種の成功の証」のようなものであった。

確かに、当時の中国人民にとって、腕時計をしている人には、羨望の対象のようでもあった、と言う。また通勤の手段として、自転車を使用していたが、これは市役所の所有物である。例えば私用に利用しても、市の公務員として「当然の権利である」としている。つまり市の公務員として、人民のために迅速に奉仕するためにも、自転車を利用することは必要である、事実、業務がスムーズに履行できるのも自転車が利用できるからだと言う。

李氏の家族は、この時期、特に欲しがった耐久消費財として、長男と長女は「ラジオ」で、妻は「ミシン」であった。この時代に、既にミシンが「欲しい商品」というのは、他の人びとは異なり、時期が早いと言える。いずれも購入することはできなかつたが、李氏は「妻が、家族全員の衣服を作るためにも、また破けた衣服の修理のためにも、ミシンをぜひ買ってやりたかった」と回答している。

以上、理解されることは、中国人民は、現在もその傾向がみられるが、50年代では、必要な衣服はすべて家庭で作られた。つまり日本のように、誰もが服装専門店で購入することはなかつた。その点、彼らは殆どミシンを欲した理由である。

市役所に勤務する李氏の60年代

60年代では、一人の公務員は、どのような消費生活が営まれたかである。

李氏の月収は62元に昇給する。ただし妻は専業主婦のため、収入はなし。通常、中国では女性と雖も、職をもって生活の糧を得るために働いているが、

妻自身は、何もできないからと、専業主婦に専念している。これに対して李氏は、特に不満はないようである。「その分自分が働けばよい」と考えている。

ただ、公務員は、国有企業の労働者と比較しても、給与が低いのが、これについて、まったく不満も、不便も感じていない。理由は、市役所で購入したものは、殆ど私物化して、給与の代わり、現物支給のような状態の生活をしているためである。また、市民に配給する現物も、事前に余分に入手して、低い給与にも、何とかそれなりに贅沢をしていると言う。このように、公務員が、不正行為を公言しても、一般の人は当然のこと、と言う受け止め方をしている。

長女は、中学校を卒業すると、すぐ「下郷」のために、家を出ることになる。下郷とは、60年代から70年代にかけて、政府は困難な就職問題を解決するために、青少年を中学卒業と同時に、農村へ移動させ、農作業に従事させる。

この時期、長女が居なくなり、家族は5人になる。長男は、中学卒業と同時に、「町工場」で働くようになり、月収18元を得る。そのため李氏の家族は、60年代、計80元で生活するようになる。

しかし、耐久消費財は、待望のミシンを購入する。また、長男の組立てとはいえ、ラジオを入手にして、自由に番組を聞くことになる。

なお、李氏は、「60年代初期、三年間連続して自然災害に見舞われたので、生活は苦しかった」「子供には何とか腹一杯食べさせてやりたいと、親だから、心配したよ」と言うことで、「ミシンがあれば、もう他にテレビもラジオも、何もいらぬ、と痛切に感じた。と言う。ただ食べ物だけは何とか欲しいと思っ
たよ」と回答している。

このように、地域により異なるが、60年代の初めは、自然災害のために、食糧難に陥ったこと、そして子供を抱えている家庭は大変であったことが理解される。市役所の自転車とはいえ、週に1回、何時間もかけて、遠方の田舎の実家に行って、いろいろ貰ってきては、「何とか飢えを凌いだ」という。しかし、実家の方も、決して豊富に野菜類などあったわけではなく、あまり無理は言えなかったが、背に腹は変えられないと言うことであった。

60年代では、地域によっては、インフラが十分整備されていないために、もし自然災害に見舞われると、災害を受けない地域からの物資輸送さえ十分にできない。そのため、李氏家族のような実家の世話になる生活を余儀なくされる。事実、正確な数字は不明であるが、その頃多くの乳幼児が餓死したと悲惨な状況を話していた。

なお当時の主婦にとって、ミシンは子供の衣服などを加工するために、必需品とも言うべき評価をされていた時代である。

市役所に勤務する李氏の70年代

70年代の李氏の家庭生活はどうか、である。つまり、どの程度60年代前

の家庭生活と比較して、生活水準が向上したのかである。

李氏の月収は、69元になる。長女は農村から「返城」（70年代の中頃、下郷政策が一応の成果を収めたということで、青少年たちは、再び都市に戻ることになる）してくる。そして工場で働き、長女も長男も共に、結婚するために、自分の給与を貯金して準備をする。李氏夫婦は、子供たちから一部、家計の足しにと受け取るが、長女、長男にある程度の経済的独立を認める必要があるということで、自分の身回品は、自分の費用で買わせる。

次女は、中学校を卒業するが、就職口がないため、家庭で「待業」という形を採り、三女は、大学に進学する希望である。李氏は、何とか一人くらいは大学に進学させたいと考えている。ただこの頃になると、食事時に家族間の話題が、家電製品のことになる。確かに洗濯機一つ取り上げて非常に便利である。しかし価格を見ると、給与の額から購入する事は全く不可能である。その意図余裕など全くなかった。洗濯は、専業主婦の妻がきちんとしてくれた。

ただ70年代では、李氏の家庭では、長男と長女が共に、結婚するために耐久消費財の購入には、非常な大計画を立てる。「大計画」とは、彼らの表現である。何としても、結婚式までに入手して、新居に運びたいと言う計画である。これについては、李氏自身が高価な耐久消費財を所有していなくとも、子供は別である。むしろ子供が、自分たちよりも高い生活水準の生活を望んだ。

長女に、ラジオと腕時計、長男には、家具セットと自転車、ラジオ、さらに彼の嫁には腕時計であった。親は、どのような場合も、子供の結婚には、これまでの中国社会における社会的な事情、歴史的な伝統から、見栄もあり、できる限り努力して、子供のために購入するのが、「親心」とされている。

李氏は、確かに預金も少ないが、二人の子供には「ラジオ」を買って与えている。公務員の彼は、情報の重要性を十分認識しているため、洗濯機、冷蔵庫、扇風機などより、優先順位を第一に挙げている。

李家では、長女、長男への購入する耐久消費財は、非現実的な存在であった。「大件」（耐久消費財）が何一つなくても、わが子の家庭に、いつの日か「大件」が揃って成功した家庭を築くことを期待する。

ただ、中国では、結婚のために、男性が女性以上に、「大件」の購入を必要とすることである。当時、ラジオと腕時計は、徐々に一般の家庭に生活必需品として、もっともよく購入された耐久消費財である。

以上、地方公務員の生活は、能力給があるわけでもなく、給与は低いものであった。しかし、70年代は文革があり、殆どの上司は下放されたり、追放されたりで大変であった。彼自身も、經理の仕事について、激しく批判されたが、じっと耐えて派手な生活について一切考えなかった。また、その余裕もなかった。ただ、78、79年辺りより、「売り手市場」から「買い手市場に」に変化して、耐久消費財の価格にも変化が見えてきた。

市役所に勤務する李氏の80年代

1978年末期から、80年代の間には、中国の政治は改革開放政策により、大きく変化し、そのため経済面にも、また人民の消費生活面に好ましい影響を与えた。特に、耐久消費財の面では、家電製品の需要が急増して、中国市場においてテレビ、洗濯機、扇風機、冷蔵庫が広く普及して行った。都市部のどの家庭でも、上記の耐久消費財は、重要な家庭用品として位置づけられた。そして80年代では、若い人びとが結婚する場合の必需品として評価された。

80年代の李氏の生活は、どうであったのか、市役所（瀋陽市人民政府）に勤務して、給与は低いものの、それなりにプライドもあり、来客も多いことから、豊かさだけは演出したいと言う気持ちが、特に強く感じられた。

李氏は、80年代には月収300元に達していた。同年齢の人びとと比較しても決して低くなかった。これまでの貯蓄を活用すれば、必要な耐久消費財は購入できた。妻は相変わらず専業主婦で、家事をよくしてくれたので、何の不自由も感じなかった。長女は既に結婚、ついで次女と三女は近く結婚と言うことで、かれらの得た収入は、独立するために必要と感じ、一切干渉しなかった。

冷蔵庫、洗濯機、白黒テレビが、職場では、いつも話題となり、中国製より高価であるが日本製の方が、性能がよい、と言うのが、皆の意見であった。

妻が、だんだん歳をとり、洗濯が身体に堪えると言って、愚痴を零していたため、洗濯機だけは、早く購入したと思っていた。しかし、「4人の子供が、全員少しずつお金を出し合って、一度に冷蔵庫、洗濯機、白黒テレビを購入してくれたのは、うれしかった」と、涙を流しながら語ってくれた。李氏は、親しい人には「親孝行の子供」の話をしては、自慢をした。また自分が、子供の頃、今の子供のように親孝行できなかった自分が恥ずかしいとも思った。

古い、汚れた住居の中だが、新しい家電製品が輝いて、その便利さと豊かさ、苦勞した50年代の生活からは別な人生のように感じられた、と言う。

テレビは、毎日、妻と夕食時、夕食後に一緒に眺めた。ニュースで外国から中国にいろいろな要人の訪問を知る。また地域紹介で、同じ中国に住みながら奥地の地名や人の生活を知って驚く。同時に「中国は大国である」ことを知らされる。冷蔵庫は、ビールや他の飲料を冷やすと、美味しいことを知る。また食品の保存に便利なことも知らされる。それより李氏には、洗濯機の便利さに驚く。妻は「洗濯が楽になった」と言う。これなら自分でもやり方を知れば、簡単である、勤めから帰ってから自分で、自分のものが洗濯できると言う。

とにかく子供が遊びに来て、口を開けば「昔と違う」で、これには反論できない、と苦笑いする。

周知のように、中国では、耐久消費財が、大都市、中都市、小都市へと伝播して最後に、農村へと普及するが、隔絶した農村は、20年位の遅れが指摘されている。

農業に従事する王氏の50年代

事例3として、瀋陽市の近郊で農業を営む王曉春氏の場合は、耐久消費財との関わりはどうかである。概して、農業従事者の生活水準は、一般に都市生活者に比較して低いと評価されている。

50年代は、王氏は20代で人民公社に所属していた。妻も同じ20代で、新婚生活を楽しんでいた。住居は親の建築したもので、親の住居とは隣接した形になっている。夫婦ともに人民公社の社員で、国の田地で働き、収入は、年間の出勤数により、生活に必要な食料が与えられ、残りは現金が与えられた。贅沢を言わなければ、日常の生活にさして不満はなかった。

周囲の人びとも同じような生活をし、食べる、働く、そして食べる、働く、の繰り返しで、この頃は、米飯を食べることはなく、殆どがこうりゃんだった。そのため、そのような生活が当然であり、普通のことと思っていた、と言う。

農民だから、良い天候に恵まれて、今年も豊作であるようにと、念じたものだが、大雨で洪水に見舞われたことも何度となくあって、大変だった。

耐久消費財といえば、王氏の場合、住居、家具、嫁の親からの贈られた柱時計である。結婚の時点で、預金もなければ、給与も低いため何も買うことができず、必要な日常必需品も、人民公社から支給されるため、家電製品についても欲しいと思わなかった。布団は、自分が実家で使用していたものを運んで、それを使用したと言う。そのため一応は生活上必要なものはすべて事足りた、と回答している。

しかしもし可能ならば、「何が欲しいですか」の質問には、意外なことに「確かに腕時計があればいいけれど、ぼくらは農業をしているから、時計をもっても、すぐ壊したり、汚したりしてダメにしてしまう。それならまだ自転車の方がいい。映画を見に行ったり、町へ買い物に行くにしても、自転車があれば便利です」とのことである。やはり必要とするものは、実利的なものに限定されるようである。

農民の50年代は、ただ「労働のために生きている」と言う感じが拭えない。また最大の敵は、自然災害である。これは、農民にとってどうしようもなく、為すがままの状態に終始した。地域や年度によっては、農民は最低の栄養基準に満たない場合もあることが、知られている。

農業に従事する王氏の60年代

60年代には、王氏の家族も、いつの間にか誕生した4人の子供も成長して、6人家族になる。そのため妻の陳小梅氏は、家事の負担が増大してきたため、専業主婦の状態、王氏のみが、人民公社の業務を継続する。ただし3ヵ年自然災害が続いたため、農作物からの年収入は大幅に減少する。ただ自宅に広い

庭があり、そこには人民公社とは別に、自前の農産物を栽培していたので、一部を「黒市」（政府の認可を得ないで、闇で売買する路上販売）で、お金を稼ぐことになる。しかし知り合いの人から、いい肥料がある、と言うので買って使ったことがある。人糞ばかり使うわけに行かず、でも結果的に野菜などは、青々として、黒市で売るのはよかったように思う、と言う。人民公社での給与は、低いので欲しいものも買えなかったが、預金と合わせて、農産物を運ぶために必要な自転車を、思い切って購入することした。それまで、荷車や担いで農産物を運んだが、自転車の方が疲れないう、速いので、買ってよかったと言う。今まで、人民公社の自転車を借りたりしたが、限られた数の自転車は、自分ばかり使用できず、黒市に使うためにも、自分の自転車が必要と思われたと述べる。しかし農家では、子供がいるかいないかで、大きく違う。皆役に立つからよかったと、王氏は言う。

ところで、闇で自前の農作物を路上販売をして、少しは現金を得たが、それで、妻のために、ミシンを購入することができた。妻が、以前からミシンが欲しいと言っていたので、約束を果たした。

いずれにせよ、王氏夫婦は、より豊かな生活を望んで、自転車、ミシンを購入することになる。ミシンがあれば、妻はあれこれ衣服を作るので、子供4人のためにも、買ってよかったと思うとのことであった。

ただ大都市から「下放」で来た若者は、理屈ばかり述べて、人民公社の社員とは意見の合わないことが多く見られた。しかし基本的には、農民の生活は大変だ、と知ったようである。農民の不便な生活を終えて、早く自宅に戻りたいと不満を述べていた。彼らからは、洗濯機、冷蔵庫、扇風機などの商品について、聞かされた。農民には、全く関係のない商品と考えていた。

以上、中国人民にとって、基本的な耐久消費財は、自転車とミシンであることが理解された。自転車は、移動と運搬のために必要である。ミシンは衣服を加工するために必要である。両製品は、確かに活用するかどうかの場合、処理速度と疲労度の負荷が異なる。

農業に従事する王氏の70年代

70年代は、王氏の長男、次男が相次いで人民公社に入社することになる。そのため、王氏の一家は三人の働き手をもつことになる。公社の人びとは、非常な歓迎をもって二人を迎え入れた。王氏も機嫌がよかった。

ただし、人民公社の政策上の欠点は、「平等を原則」としたため、働いても怠けても報酬は同じ、と言うことで、たとえ3人が公社に出て勤務しても、収入は期待するほど増加しなかったと不満であった。つまり、王家の三人は働かない、あるいは働けない人びとの分まで働くことになる。しかし公社の中では、同条件で働き、同条件の給与を受けながら、生活状況に大きな格差が見られた

のが不思議であった。公社の幹部などは、幹部の特権を悪用して、公社の施設、器具など、私物化していた。

ただ長男、次男とも結婚する予定にあったため、たとえ給与が低くても、貯蓄せざるを得ず、いつもどうすれば、現金が手に入るかを考えていた、と言う。二人の子供は、王氏に対して、「もっと他のものを栽培するように主張した」。

農村から、「下放」の人びとが都市に戻って行く。そのため、少しは食料も楽になるように思えた。彼らにとって、何が利益か不明であるが、農民の苦勞だけは理解されたと思う。例えば、1927年に毛沢東が「革命は農村から始まり、やがて都市を包囲する」と主張したが、要は農民の虐げられた不満が革命を引き起こす導火線になる、と言うことである。

周囲がテレビ、冷蔵庫、洗濯機と購入していても購入することはできなかった。この時期、王氏は二人の息子のために、何としても住居を建ててやらねばならず、「70年代は、わが家は二人の子供の住居を建設するために、経済的に苦しかった」と回答している。しかし「自分は、よい息子に恵まれ、電気製品がなくとも幸せであった」と述懐している。

衛生医療チーム班が、農村にやってきたが、あるものは産児制限を、他のものは必要ないと言うので、余計なことと思う。「自然が第一」と考えたと言う。

しかし、徐々に農村内部において、つぎのような変化が見られてきた。

1. 人口の増加である。どの家庭も子供が生まれ、またその子供が成長して結婚して、子供が生まれる。耕作面積に限りがあり、人口に見合った食料の供給が、重要な課題になってきた。ときには、自然災害に対して農民は全くの無防備で、為す術がなかった。
2. 個人が必要とする栽培用の資材が必要になってきた。人民公社や共同体による農業経営に支給される化学肥料、ディーゼル燃料、作物を覆うビニール、さらには殺虫剤なども、必ずしも十分でないが、いつも不足気味であった。まして個人で路上販売するための私有栽培用のものは、個人で購入するか、何らかの方法で捻出しなければならない。購入するには、当然現金を必要とした。
3. 栽培作物の多様化である。これまで政府の方から指示された種目だけの栽培の場合、農民にとって不安定なものであった。特に、自然災害に見舞われ、被害を受けた場合、自分で解決しなければならなかった。また特定化された農産物は、必ずしも路上販売できなかった。より換金できる作物を、可能な限り栽培する方向である。
4. 農民の中には、出稼ぎに出るものが増加する。70年代に入り、多くの農民は、家庭の窮状を見兼ねて、食いぶちを減らすために、家を出て、街で働くか、どこかで職を捜して賃金を得ようとした。特に、子供の多い家庭では、必ず次男以下、あるいは次女以下の子供は、農村から離れた。

農業に従事する王氏の80年代

80年代では、中国人の生活にめざましい変化が、みられるようになる。、例えば、デパートや商店には、豊富な商品が溢れ、多くの顧客で賑わう光景が、あちこちで見られるようになる。1978年には、クーポン（糧票）がなければ購入できない統制品は78品目であったが、82年末には僅か9品目に減少する。さらに83年には綿製品も統制からはずされ、最後まで残された食糧も、統制から撤廃されることになる。¹⁵⁾

1984年の時点でさえ、耐久消費財への需要はすさまじく、カラーTV、冷蔵庫、洗濯機は、最大の人気商品であった。60年代末から70年代初期にかけては、腕時計、自転車、ミシン、に人気が集まったが、70年代末から80年代初頭にかけての白黒TV、携帯ラジオ、デジタル時計の「三大件」に代わって、「新三大件」と称された。¹⁶⁾

80年代の王氏の家庭では、人民公社の廃止に伴い、自由に農産物の売買を考えるようになる。二人の息子も協力して、農産物を近くの街の路上で販売して、少しでも金銭を得るための努力をする。そこで、野菜や果実の栽培が必要と知る。また耕地の一部分を、それに当てる。妻は、鶏や家鴨を飼育して、その卵の販売を、王氏に依頼する。王氏も真剣に努力する。日曜日ごと、街に出ることにより、いつの間にか商店で販売されている耐久消費財に関心をもつようになる。「テレビでも、カラーのものは白黒より、美しいことを知る」。

「冷蔵庫でも、洗濯機でも、いろいろあることを知って驚く」。特に、街の人びとは、金儲けの話ばかりするので、時代が変わったと思う。

80年代後半には、北京から、大量に村へ農産物の大量仕入れに仲介業者が来訪する。契約を結ぶもの、契約に応じないで路上販売に固執するものさまざままで、王氏は路上販売に固執する。「後から契約しても遅くない」と言う考えである。背広にネクタイ姿も、気になるが、王氏は農民の自分には必要ないと思うが、成人した子供には着て欲しいと思う、とのことであった。

特に、王氏にとって80年代の特徴は、豊富な情報との接触であった。50年代は、自分の家族の生活だけ、60年代は、村の事情に通じるようになり、70年代は、商品の「4大件」に関する情報とそれら商品と関連した生活の情報を知ることになる。

1958年1月に、「戸口（戸籍）登記条例」が公布され、これによって、中国人はすべて、常住地においての出生、結婚、移動など、届けるように義務づけられる。これは農民の都市流入を規制するのが狙いであった。この条例により、農民に生まれれば農民、都市に生まれれば労働者になることが、原則的に規定された。しかし、王氏は徐々に、この規制が崩れて行くように感じた。「移動の禁止」も無視した農産物の販売である。

15) 中国研究所編「新中国年鑑、1984年版」、大修館書店、77頁、261頁

16) NHK取材班「中国・新しい風」、日本放送協会、1984年、30頁

90年代前半の生活費収支と耐久消費財の所有

中国の場合、都市と農村とでは、生活の内容、また水準において、著しい差異が指摘されているが、時代が下るにつれて、一層顕著なものにしている。

中国は広大で、人口が多いため、他国の基準で評価しにくい部分が、多々見られるが、都市と農村間だけでなく、農村内部においても、理解できない生活上の格差がある。

なお海岸寄りの経済特区の生活者は、経済発展の影響を受けて、豊かさを享受しているが、内陸部の農村生活者は、変化が滞り、経済発展の恩恵を受けていない、と言う観点で同じ中国でありながら、最大格差の比較を問題にする研究者もいる。

表1. から都市生活者一人当たりの収支は、同じ90年代前半（92年、93年、94年）でも、非常な伸びがみられる。全国規模で都市生活者と農村生活者とを比較すると、

表1. 1994年度の都市と農村生活者の生活費の比較

	生活費収入	
	都市生活者	農村生活者
1992年	1,826.07元	783.99元
93年	2,336.54元	921.62元
94年	3,179.15元	1,220.98元

	生活費支出	
	都市生活者	農村生活者
1992年	1,671.73元	659.01元
93年	2,110.81元	769.65元
94年	2,851.34元	1,016.81元

「中国経済・産業データ・ハンドブック、'95年版」 183頁
大都市生活者の生活費の収支は、農村生活者の2-3倍の開きが指摘される。

さらに、以上の収支も都市別に検討した場合、つぎのような事実が理解される。

- a. 都市生活者の収入が、92年と93年とを比較しても、非常な増加傾向を示している。その伸び率は、農村生活者の伸び率と比較にならない。この傾向は、改革開放政策を導入して、一層その傾向を著しいものにした。
- b. 生活費収入の高い都市として、¹⁷⁾ 北京、天津、上海、浙江、広東がある。その中

17) 「中国経済・産業データ・ハンドブック、'95年版」

(株) アジア産業研究所、1996年、183頁

表2. 代表的な都市の耐久消費財の所有状況(100戸当たり, 1994年)(台数)

	オートバイ	自転車	ミシン	洗濯機	扇風機	冷蔵庫	カラーTV
北京	2.40	246.80	65.60	102.80	133.60	104.40	111.80
天津	8.00	233.80	75.80	90.60	124.00	95.20	100.60
上海	0.60	107.20	75.40	73.00	204.00	95.40	101.40
浙江	2.85	226.03	81.39	84.17	279.93	92.78	90.26
広東	16.77	248.63	86.08	92.68	351.38	70.20	98.00
広西	6.68	242.14	86.50	88.18	310.44	60.76	73.26
全国	5.26	192.00	64.38	87.29	153.79	62.10	86.21

「中国経済・産業データ・ハンドブック,'95年度版」,

195頁

(株)アジア産業研究所, 1996年

表3. 代表的な農村地域の耐久消費財の所有状況(100戸当たり, 1994年)(台数)

	オートバイ	自転車	ラジオ	ミシン	洗濯機	扇風機	冷蔵庫	カラーTV
内モン古	1.59	121.76	38.52	78.57	17.03	3.08	0.49	14.07
安徽	0.52	116.71	39.23	54.55	1.84	137.97	0.97	5.52
江西	2.00	126.24	26.16	42.29	0.98	84.49	0.65	3.35
四川	1.02	59.51	13.06	25.25	5.31	59.64	0.75	4.35
貴州	0.89	24.06	6.21	24.29	4.42	4.82	0.31	2.10
チベット	0.42	70.63	33.96	29.17	0.63	—	0.21	2.29
青海	2.17	85.67	32.67	52.67	9.17	0.17	0.33	10.00
全国	3.19	136.50	31.19	62.75	15.30	80.91	4.00	13.52

「中国経済・産業データ・ハンドブック,'95年度版」,

204頁, 205頁

(株)アジア産業研究所, 1996年

でも、耐久消費財の支出において、全国平均67.29元より高い地域としては、

北京, 169.15元	浙江, 114.15元	広東, 228.12元
上海, 95.58元	天津, 80.01元	広西, 94.80元

である。しかし意外なことに、チベットが、85.79元と高いことである。これは、流通コストが高いとか、外国からの観光客の影響力であるのかも知れない。中国の内陸部では、山間部の農民が生活している。これらの農民も、決して現状に満足するわけではなく、豊かさを追求することについては、平野部の農民と比較して真剣である。¹⁸⁾

- a. 山間部の農民は、利益の少ない養蚕を止めて、鶏、豚、および山羊の飼育により、収入を多く得ようとした。
- b. 山林の伐採、道路の整備などの建設現場に仕事を求めて、高賃金の建設労働者として従事した。中には、岩石を砕いて、石材の販売を考えることもあった。

ここで、1994年度の資料により、中国の代表的な都市生活者の耐久消費財の所有状況（表2、参照）と代表的な農村地域に居住する農村生活者の耐久消費財の所有状況（表3、参照）について、検討してみたい。¹⁹⁾

まず表2. については、すべての耐久消費財に関して、全国平均を上回っているのが、「広東」である。特に「広東」は、オートバイ、自転車共に所有率が多角、中でも土地柄、高温多湿のためか、扇風機の所有率は「広西」と並んで、全国平均が高い。なお「北京」は、オートバイ以外が全国平均より高いのが、特徴である。「北京」はまた、自転車、冷蔵庫、カラーTVについて、全国平均よりはるかに上回っている。特に、カラーTVの普及率がもっとも高いが、これは政治、経済、文化の中心と言う地域性と関係しているようである。その点、経済都市、商業都市の「上海」や国際貿易港として、また新興産業都市「天津」も、北京に類似した大都市であるため、カラーTVの所有率が高い。人口の密集している「上海」では、オートバイ、自転車共、所有率が全国平均よりも低いのは注目される。なお、ミシンは「広東」「広西」が高い。

表4は、農村地域の中でも、特に貧困地域として有名な省が、選ばれている。中でも、すべての耐久消費財について、全国平均よりも低いのが、「貴州」と「四川」である。特に、「貴州」は、ラジオ、洗濯機、扇風機、冷蔵庫、カラーTVの著しい低い所有率には、電気のそのものが架設されていないため状態と関係していることが理解される。「四川」にもそのような遅れた地域であるが、「貴州」に比較すると、まだ耐久消費財の所有の高いことが理解される。ここから、「貴州」が中国でも、もっとも遅れた地域であることが

18) エズラ、F. ヴォーゲル（中嶋嶺雄監訳）

「中国——改革下の広東」、日本経済新聞社、1991年、352-353頁

19) 「中国経済・産業データ・ハンドブック、'95年版」

（株）アジア産業研究所、1996年、195、204、205頁

理解される。「青海」は、やはり代表的な内陸部である。そのため交通機関も十分発達していないが、自転車、ミシンについて、半数の人びとが所有している。なお、「チベット」はまさに電気設備は十分でないが、外国からの観光客が多いためか、「貴州」と比較しても、豊かさが評価される。

劉玉玖は、²⁰⁾ 中国の都市の変化状況について論じている。彼は、都市は経済発展の水準が高く、第二次産業、第三次産業の発展のいずれにも、目覚ましいものがあると言う。そのために、都市生活者は、雇用機会に恵まれているだけでなく、情報や現金収入も得やすく、多様な商品と接する機会にも恵まれて、豊かな生活を享受できるとしている。

しかしすべての都市生活者が、そのように経済発展の恩恵を受けているとは思えない。確かに、中国国内の農村地域と比較すれば、豊かな生活を実現できる就労の機会が多いかも知れないが、北京、広東、広州駅前の「盲流」現象を見れば、どれほど彼らに就職する機会があるのか、である。都市で就職希望の大群を見たとき、まだまだ厳しいものが感じられる。

載星翼によれば、²¹⁾ 都市は過密人口のため、失業問題を始め、住宅難や交通渋滞の問題に直面している、厳しい指摘をしている。またゴミ処理や排気ガスなどによる大気汚染も無視できない問題であると指摘している。

例えば上海の人びとは、大気汚染、54.5%、ゴミ（固形廃棄物を含む）54.3%、騒音、45.7%、飲料水37.7%などに不満が集中している、と述べている。しかしこれらの問題は、豊かさを追求すれば避けられない、当然の報いである。

中国では、徐々に生活水準の向上と共に、住宅問題への関心、また現在の住宅事情に対する不満が著しい。1996年7月以降、住宅建設は新たな消費を促進する上でも、取り組まねばならない問題とされている。

馬洪、任興洲は、²²⁾ 中国の経済成長を増大させる原動力があるとして、問題提起されるに至って、その後の諸々の調査を実施する発火点となった。

確かに、住宅建設は、多くの住宅関連の商品の需要を促進することになる。それだけに馬洪、任興洲の調査結果は、中国各地、中国各界にも大きな刺激となった。例えば、中国青少年研究センターが、1995年に実施した調査では、²³⁾ 北京、遼寧、吉林など9省

20) 劉玉玖、「わが国都市生活者の数量的評価研究」,

中国統計, 1996年8月号, 19-20頁

21) 載星翼、「第14章, 体制, 政府政策による生活数量的評価」

(馮立天, 載星翼編著「中国人口生活評価再検討」, 高等教育出版社,

1996年, 359頁)

22) 馬洪, 任興洲, 「中国市場発展報告, 1997」, 中国發展出版社,

1997年, 136頁

23) 陳劍編著, 「流失的中国」, 中国城市出版社, 1998年, 110-112頁

に居住する青年は、の者が、住宅がないと、不満を示している（表4．参照）。

これは、「結婚ができない」という原因と関係していて、事態が深刻であることを示している。都市部では、大半が、両親と同居を余儀なくされており、その両親も本来ならば退職した企業の住宅から撤去しなければならないのに、移る住宅がないために、そのまま居座るケースの多いことは、周知の事実である。消費低迷を脱する上で、耐久消費財の需要を喚起するためにも、中国政府の抜本的な住宅投資が、まず期待される所以である。

表4．企業別に見た住宅難への不満

国有企業	18	%
集団企業	22.6	%
三資企業(合, 合, 資)	17.4	%
個人, 自営業者	22.7	%

表4．は、いずれにせよ、個人の自由が確保されている集団企業や個人、自営業者の方が、現在の住宅事情に対して不満をもっていることは、注目される。

ここ数年は、中国国民も住宅への関心が高まってきている。馬洪によれば、²⁴⁾ 80年代から90年代にかけて、北京、上海など一部の都市において、二回にわたり住宅の販売を行っている。当時の価格は、1平方メートル当たり300円で、また現在、人の住んでいる古い住宅では1平方メートル当たり100元以下で、個人に販売された。この時期、中国は計画経済から市場経済に移行したばかりで、労働者の給与はまだ低いままであったが、「住宅部分産権」が、一般の生活者にも分与された。しかし購入者はいったん購入したものの、値上げを待って売却したため、政府は1986年に中止した。

しかし住宅への不満が高まるために、遂に1994年に二度目の住宅販売に踏み切ることになる。ただし、この場合も「近いうちに販売価格は上昇する」として、購入した人びとはまたしても、投機の対象になったため、1995年国務院は直ちに販売停止に踏み切るが、地域によっては販売停止が徹底しないところも出て、混乱を引き起こすことになる。

鄧小平の「先富論」政策により、²⁵⁾ 経済高度発展と共に、高所得者が誕生する。例えば歌手、俳優、外資系企業の代理人、個人企業の経営者などは、「高級住宅小区」に居住し、必要なかつ高価な耐久消費財を殆ど所有している状態にある。彼らが新規に住宅を購入しても、その地に居住する意思は全くないのが当然である。

24) 馬洪編著「中国市場発展報告、97」、中国発展出版社、1997年、
140-145頁

25) 「中国計画白書、98年度版」、
アジア総合開発(株)・中国ビジネス開発センター、295頁

90年代の人びとの消費生活

先に取り上げた3氏の事例を通して、50年代、60年代、70年代、80年代についての消費生活を検討したが、そして徐々に豊かな生活へと生活水準の上昇が3氏とも見られたが、90年代に入って、どのような生活を享受しているのか、引き続き面接によって得た資料を、ここで整理される。

都市の国有企業に勤務した張氏の場合

張氏も奥さんも二人とも、60歳代で既に国有企業では定年を迎えていた。そして年金として、月に1000元支給され、静かな生活を過ごしていた。毎日、早朝に起きて、近くの公園で、健康管理のために二人で太極拳をして、帰宅して朝食を取っている。特にすることがないので、電話で親しい友人と話をしたり、公園で会う約束をして将棋をしたり、食事の買物をしたり、テレビを見たり、ビデオ・テープで映画を観たり、友人から小鳥を貰ったので、その世話をしたり、と言う生活である。

完全に社会主義社会の典型的な年金生活者と言うことができる。二人の娘の内、長女は結婚して他所で生活をし、次女が税務署の公務員で、張氏夫婦と一緒に生活している。次女は、月収約600元で、一部は家庭に入れている。

家庭用品も、80年代と比較して、大きく変化した。例えば、電子レンジ、パソコン、ビデオ、電話、スチーム・アイロンなどが、新たに購入された。

電子レンジは、張氏夫婦が60歳になったとき、結婚25周年を祝って、長女が贈ってくれたものである。中国国民は、冷えたもの、冷たいものは、口にしないため、この製品をくれた長女に感謝する。ただし長女から取扱いについて、注意するよう言われているので、未だに緊張するとのことである。

パソコンは、張氏夫婦が使用することはない。これは次女の所有品であるが、次女が何かと言えば、「便利だ、便利だ」と言う声を聞かされている。インターネットで海外の情報を追求したり、友人との交信もしていて、張氏自身、自分とは別世界に生活している感じがすると言う。一度、画像に英語が並んでいて、いろいろ写真が現れたところを見せられて、「これは、アメリカの博物館よ」と言われ、即座に信じられなかった。仕事も、パソコンがないとできない、と説明され、自分が何十年も前に定年退職で職場を辞めた気分になると話していた。張氏が、「必要なものはもっているし、特に今購入したいものはない」と、きっぱり発言した後、「何とんでも、今住んでいるこの社宅は、会社から買ったため、自分の家ですよ。そう、自分の一番大きな財産だよ。会社は資金に困っているし、従業員に売買してもよいため、ローンで買ったもの」と回答した。しかし価格については、「古いから安い」と言うだけで、それ以上

は話さなかった。

張氏の90年代は、悠々自適の生活と言えるが、健康で未だ労働に耐える体力が評価されたが、今は何もしたくない、と再就職の意思を示した。多分、新しい近代化されつつある職場に復帰するには、自信の欠如も否定できない。ただ平均の家庭では未だ所有していない耐久消費財を所有していること、そして念願の住居を購入したことで、もう何の不満もない、と言うことのようなのである。

都市の市役所に勤務する李氏の場合

中国では、公務員はいろいろな特権があり、在職中は公私の区別なく自転車、クルマ、さらには市役所の施設を利用して、退職後は、非常に不便を感じるようである。李大飛は、やはり60歳代になって、市役所では一応定年退職したことになる。一応と言うのは、現在年金収入として、月約500元を支給されているものの、退職後も、近くの小さな国有工場に、会計担当として勤務して、月収700元を得ているためである。計1200元は、非常に豊かな生活を享受することができる。彼のように経理について資格のある者は、どの企業でも、経理の監査が厳しくなるにつれ、必要としている。

奥さんは、結婚以来、一度も就職せず、専業主婦で通してきた。李氏は、それに対して不満を感じていない。市役所の上層部の人の中に、自分と同じように奥さんが家庭を守り、家事を取り仕切っている人がいるので、自分もかれらと同じようなエリート意識をもっている。

長女、長男、次女の三人は、既に結婚して、李氏と別居して独立している。三女は、まだ結婚しないで、李氏夫婦と同居しているが、自由市場で八百屋を営み、「个体戸」として成功している。三女は農業を営んでいないが、李氏の紹介で、知り合いの農民から、安く農産物を仕入れて販売している。月収は約1500元である。今は資金を貯めて、そのうち大きな事業をしたい、と言う。

長女、長男、次女の三人は、ときどき子供を連れて、遊びに来る。李氏夫婦は、「孫が可愛い」と言う。ただ一人っ子政策のため、現在孫は三人だが、全員が女兒で、「今は、男でなくともよい。皆同じ」と言う。

李氏の家庭では、必要な耐久消費財は、既に80年代に所有していて、現在は、家庭に電話が敷かれ、便利になったと言う。李氏は、ポケット・ベルをもっていて、これで十分と言う。三女は、バイクと携帯電話を所有している。

長女、長男、次女の三人の家庭は、テレビ、洗濯機、冷蔵庫、扇風機、自転車があり、電話がない。家族全員が何か連絡を取る場合、電話があった方が便利なので、何とか全員が所持するようにと話している。終日家庭にいて留守番の李夫人も電話があればよい、と暗に設置を、勧める。李氏の夢は、住宅を購入することで、一人でも多くの家族が宿泊できる家屋を新築したい、と言うの

が、最後の望みと言う。三女は、クルマが欲しいと、はっきり答える。

公務員であった李氏にとって、住宅を個人で購入するとは、当初の計画になかったが、自己資金で購入した住宅は、私有財産になるとすれば、真剣である。家族全員が宿泊できる住宅を夢見ている。事業に成功している三女は、現有する耐久消費財すべてを所持して、その利益に預かっているため、最後は事業に必要なクルマになっている。

郊外の農村で労働する農民王氏の場合

農村では、90年代に入ると、ある意味では都市と隔離されていた状態から、壁が取り払われたように、農産物を巡って、交流が頻繁に行われることになる。

王曉春氏は、60代で自宅で、奥さんと夫婦二人で、静かに過ごしている。若いときはかなり無理をしたためか、身体のアチコチが痛むと言う。「食べるものも食べないで、とにかく働いた」と言う。今は、自分たちが食べる分だけ栽培して、残った分は、欲しい人に売るくらいで、年金の額は少ないが、それで十分と言う。

耐久消費財も、80年代の頃と変わらず、白黒テレビ、冷蔵庫、自転車を所有する程度で、洗濯機も、扇風機もない、とのことである。カラーテレビは、白黒テレビがまだ使用できるため、必要がない、とのことである。

ただ本人が、引退生活のような状態も、長男（40代）が、「運輸个体戸」として、「東風」ブランドのトラックを所有し、成功しているためだ、と言う。

長男の住居は、三階建ての豪邸で、近隣では有名である。彼の家庭ではほとんど必要な耐久消費財が揃っていて、列挙しただけでも、カラーテレビ、洗濯機、冷蔵庫、テープレコーダー、炊飯器、温水器、ビデオ、カメラ、電話、と揃っている。典型的な裕福農民である。彼の年収は、約10万元と父親王氏の説明である。王氏は、また長男の所有する耐久消費財について、よく覚えているのに驚かされた。しかし長男の家に行くことは殆どない、と呟く。

次男が、王氏の後を継いでいるように思われる。90年代は、豊作が続き、年平均は約7000元ほどになった、と言う。4人家族の平均的な農民である。住居は、自分の所有、白黒テレビ、テープレコーダー、三輪自転車（荷物用）、自転車が二台である。40代の年齢である。次男の方に親しみを感じている。

長女は、子供が三人で、5人家族。辺鄙な山地に住み、一人っ子政策に無関係の山地農民である。年収は約3000円で、自宅は貧弱だが、自分たちの所有である。耐久消費財としては、ラジオと柱時計ぐらいのものである。

次女は、子供二人の4人家族である。近郊農業に従事するため、日常の生活はほとんど都市生活者と変わらない。年収は約1万元である。カラーテレビ、冷蔵庫、テープレコーダー、炊飯器、温水器、自転車を所有している。

子供たちは、王氏の半分以上の歳月で、必要な耐久消費財を整えている。

最近（97-98年度）の消費動向について

1978年に改革開放政策が導入されて、1998年でちょうど20年経過したことになる。特にこの90年代後半は、前半と比較して、中国は著しい経済の飛躍的な発展を遂げることになる。つまり90年代に入り、中国は経済発展するにつれて、国民の収入は一層増加することになる。そのため高価格の耐久消費財でさえ、購買が可能になってくる。

この状況については、多くの統計資料の示すところである。また、同時に消費志向も大きく変化して、多様化傾向を示すようになる。このことは、過去の「3大件」「4大件」のような超人気耐久消費財の商品でさえ、個人により好みの商品を選択するようになる。

表5. 1997年度の代表的な耐久消費財の所有率（%）

製品	所有率	製品	所有率
テレビ	89	ビデオ	12
ラジオ	60	電話	25
テープレコーダー	54	携帯電話	4
扇風機	72	乗用車	1
炊飯器	75	ポケベル	15
スチームアイロン	54	オートバイ	14
自転車	86	オープンレンジ	3
洗濯機	49	エアコン	6
冷蔵庫	36	パソコン	2

中国経済週報, 1998年2月5日 18頁

表5. は、最新の資料であるが、現在は少なくともこのパーセントより増加しているのは事実である。多くの先進諸国と同様、幅広い方向で、大都市から中小都市に、さらに農村地域へと、中国全土に徐々に浸透して、各家庭が所有するものと思われる。

ここから、高いパーセント順にベスト5を検討すると、テレビ、自転車、炊飯器、扇風機、ラジオの順となっている。

テレビが、完全に重要かつ必要な生活必需品として定着したことである。番組内容も、単純な教宣活動の手段から、幅広いニュース、娯楽、教育まで、多彩な内容になって、人びとの生活に欠くことのできない商品になっている。自転車は、クルマを所持できない人びとにとって、有力な交通手段であり、荷物運搬の手段として活用されている。また炊飯器は、職をもつ主婦にとって必要な生活必需品である。扇風機は、涼を取る人びとには必要である。さらに換気に必要である。ラジオは、古くからの情報収集の機器である。

例えば、商品を、つぎのようなカテゴリーに分類した場合

生存消費財：生きていく上で、基本的な商品、食品、衣服、住宅など

生産消費財：仕事をしていく上で、必要な商品、自転車、携帯電話など

啓蒙消費財：自己の能力を高める商品、図書、テープレコーダーなど

享楽消費財：レジャーや遊びに役立つ商品、ビデオ、テレビ、オートバイなど

安全消費財：事故、災害を避ける上で役立つ商品、冷蔵庫、ポケベルなど

健康消費財：衛生思想の普及に役立つ商品、洗濯機、エアコンなど

となるが、中国の場合、50年代およびそれ以前に所持された商品は、すべて生存消費財に位置づけられ、上記のような基準に合致しない点が、特徴と言える。

塚本隆敏は、²⁶⁾ 中国経済の規模は、GDPでは96年に6兆7,795億元で、世界の第9位にランクされ（ただし世界銀行の一人当たりの所得順位では、世界第92位、日本の64分の一）、97年のGDPは7兆4,772億元で、外貨準備高では、日本について世界第2位になる。しかし中国経済はマクロ的にみた場合とミクロ的にみた場合とは、その間にかなりの乖離があると指摘されている。特に、その富は大都市に集中して、農村地域との所得格差が歴然として、消費生活面においても著しい格差が、他の資料にも指摘されている。²⁷⁾

しかし注目すべきは、1997年の後半から、不況の波が中国にも押し寄せ、都市生活者の消費低迷が問題になる。中国国家統計局の調査（1998年）によれば、²⁸⁾

北京、上海、広州、成都、瀋陽、天津、西安、済南、南京、武漢、昆明、福州の12都市（各5,000名）、計6万人を対象とした「消費需要の低迷の原因は何か」の調査（1997年11月－1998年3月）を施行しているが、この調査を通して、耐久消費財の普及状態も理解される。

それによると、「一人当たり1ヵ月の所得」では、

- | | |
|----------------|-----|
| 1) 499元以下, | 24% |
| 2) 500－999元, | 49% |
| 3) 1000－1499元, | 19% |
| 4) 1500元以上, | 8% |

となっている。つまり999元以下で、上記大都市生活者の73%を占めている。そして1500元以上が、まだ8%に過ぎないことを考えれば、外国企業にとって、魅力ある市場としての位置づけは、まだ先の問題と思われる。

26) 塚本隆敏「中国における消費構造の変化」、中京商学論叢、第45巻、第1号、
2頁

27) 「中国情報」、1998年1月7日付け記事

28) 「1998年中国都市生活者消費形態調査結果報告会」、国家統計局中国経済
景気観測センター、1998年5月、3－7頁

なおこの調査結果では、「家電、耐久消費財」について、テレビは97%、冷蔵庫は88%、洗濯機は87%、湯沸器は、炊飯器、換気扇、カメラなど、約60%の所有が記されている。ここ数年、ビデオは28%、エアコンは34%、電子レンジは23%も所有されて、幅広い耐久消費財が普及し始めているのは確かである。さらにポケット・ベルは36%の家庭に所有されており、現に北京、南京、福州、昆明などでは、40%以上が、また済南では比較的安く、それでも20%の所有が示されている。特に携帯電話では、福州20%、上海が15%、そして北京、南京では12%前後所有している。

以上から、耐久消費財に関して、現在は12の大都市でかなりの製品が普及していることが理解される。今後、彼らが購入したい商品としては、挙げている製品に、ビデオ、エアコン、ステレオ、電子レンジ、パソコンの順となっている。

なお、調査の結果、83%の人びとが、ブランド品を好み、38%の人びとは、新たなブランド品を選択する。広告については、49%の人びとがどのような広告であれ、商品選択のために活用していない。しかし、テレビ広告をみた47%の人びとは、そこから商品を選択している。買物については、64%の人びとは購入前に、数ヶ所の店で価格を調べ、そして74%の人びとは、少しでも安いものを購入することが理解された。

中国・ギャラップの「1997年度・中国全国消費者の消費志向と生活スタイルの趨勢に関する調査報告」によれば、中国では世帯の9割近くがテレビを所有しており、1994年の調査時点の81%より、上昇したことが分かっている。また1997年度の調査では、農村部のテレビ保有率83%が、都市部の保有率98%に近づいていることも明らかになっている。²⁹⁾

現在、中国の大半の家庭で所有されている生活必需品として、ラジオ、テープレコーダー、電気炊飯器、自転車、洗濯機がある。これら商品に加えて、今後何が購入されるのが、その家庭の嗜好性が表現されることになる。

ラジオは、テレビの有無に関係なく生活必需品である。携帯可能、持ち運び自由のため、日本と同様「何かをしながら、聴く」ことができるため重宝がられている。番組も多様になってきたことも理由の一つである。テープレコーダーは希には家族の声を録音されるが、大半が好きな音楽を再生したり、カラオケを楽しんだりする商品として評価されている。

以上、中国人が贅沢な生活を望むようになった原因として、以下が挙げられる。³⁰⁾

1. 経済事情が好転して、経済活動が活発になってきたこと。
2. 企業の自主権が拡大され、剰余金を労働者の報奨金に活用されるようになったこと。
3. 中国人の間で、質素な服装、貧しい生活が軽蔑されるようになってきたこと。
4. 外国文化や国内の外国人と接して、豊かな生活を憧れるようになったこと。
5. 海外に出稼ぎ、留学している家族、知人からの情報に影響されるようになったこと。

29) 「中国経済週刊」, 1998年2月25日, 16頁

30) 「中国統計年鑑, 1997年版」, 中国統計年鑑出版社, 299頁

結び —— 今後の消費動向と問題点

毛沢東がこだわり続けた課題に、「三大格差の撤廃」がある。³¹⁾ つまり都市と農村、労働者と農民、知的労働者と肉体労働者の三つの格差である。格差は、種々な観点から指摘できる。本研究では、格差を日常生活における必要かつ重要な耐久消費財の充足と享受の程度で問題にした。

国有企業の張氏、公務員の李氏、農業従事者の王氏の三氏は、中国の激動期50年代では20歳代であった。揃って60年代、70年代、80年代と過ごし、この90年代では静かに過ごしている。共に必要な自転車を手に入れ、僅かな給与を貯蓄し、子供を育て、その子供がまた成長し、結婚し、新しい生活感覚で必要な耐久消費財を整備している。

以上、中国の50年代から現在までの経緯を辿り、その中で生活する典型的な中国人の消費意識、消費観について、事例を通して検討を加えた。さらに、政治と切り離せない諸々の経済政策との関わりで、残された重要な問題点について、「結び」において触れてみたい。豊かさへの追求は、生活水準の向上を意味し、同時に留まることのない欲求の実現化の現状についてである。

成熟市場化した家電製品

1980年1月16日に、鄧小平が党中央の幹部会議において、①反覇権主義による世界平和、②台湾の祖国復帰に合わせて、③「経済建設」による改革開放政策の実現化について、発言をする。これに合わせて、建設の実現に向けて、体制固めが行われた。これは、毛沢東時代と明確に区切りを付けるための活動を事前に予告するためであった。

同年4月1日には、外国人のための外貨兌換券が発行され、中国人民元とは区別して、金融秩序の確立を目指すことになる。これは、価格の二重構造を示し、特に外国人からはドルを外貨兌換券に交換させて、中国人民とは異なる価格体系により、消費を余儀なくさせるものであった。街路では、ドルを人民元に交換する闇経済を生み出すことにもなる。

ところで、中国に、市場経済が導入されて、中国人民の消費意識は大きく変化したのは事実である。約12億の人民が、豊かな生活を夢見るときは、エネルギー源、資材、さらには消費財すべての莫大な消費が予測される。ときには浪費と称される程、必要以上の消費を望んでいる部分も指摘される。このような状態に対して、質素に育った両親が、子供に「質素と儉約」を説くと、「時代変了」（時代が変わったのだ）と反抗して、子供たちは両親の発言を聞かないとされている。³²⁾

31) 天児慧、「中国改革最前線 —— 鄧小平政治のゆくえ」

岩波新書、1991年、162-163頁

32) 立花丈平、「新中国はどこへ行く」、時事通信社、1988年、22-25頁

確かに85年以後、中国ではその著しい経済の発展ぶりが、生活の随所にみられるが、資源は無限でないことは、最近の中国国民も十分理解していることである。

中国の都市の1人当たりの食費は、1978年の170元から、1985年には390元に増加する。その内訳も、主食の消費量は減少して、副食品の消費量が増加している。1985年の肉類や卵、水産物などの副食品の消費量は、1964年より60%も増加している。これからも、ますます食品の多様化と外食の機会の増大が予想されている。

50年代またはそれ以前の食生活とは想像の付かない発展ぶりである。豊かさは、家庭内の耐久消費財の充実ぶりからも理解される。³³⁾

85年当時では、北京では、中型の冷蔵庫は、中国製で約750元(約3万円)、日本製が約1000元(約4万円)である。また中国製の白黒テレビが400元(約1万6000円)、日本製カラーテレビは1500元(約6万円)である。かれらの平均給与は、約70元(約2800円)であるから、このような高価な商品が購入できないのが常識であるが、しかし想像以上の購買力は、彼らの「タンス預金」によることと、海外からの送金が可能になったため、親戚の華僑、留学生などからの送金により購入されてきた。

88年のような狂乱的な需要が高まると、これらの価格も上昇していくことになる。95年後は、これら家電製品も成熟市場となり、逆に値下げ競争が展開されて、完全に「買い手市場」になっているのが現状である。

今後、成熟市場に直面した中国の家電業界は、どう克服するのか、あるいは活路の方法をどう見出すかである。国有企業の経営管理が、今では有効でないことは、言うまでもない。これまで長く物不足時代が続いたため、顧客に対する配慮を全く欠いた状態でのビジネスでは成功しないのは当然である。今後、新しいビジネスを始める者も、また現在のビジネスに息詰まりを感じ、打開の道を探ろうする者も、上村幸治によれば、³⁴⁾

94年10月24日、北京市の国際会議センターで、北京市青年連合会の開催した講習会に、多数出席したと記述されている。ここでは、ビジネスに成功を取めた有名人の意気軒昂と話す態度、他方講話に耳を傾ける多数の聴衆の姿が、目に浮かぶようである。

「市場と言うものを、みなさんは本当に理解していますか、軍隊が何を買ったがっているか、農民は何が欲しいか、どうして香港の商品が売れるのか、判りますか、それを考えなさい。伝統的な古い考えは捨てて、市場を開拓してください」。

確かに、中国の人びとは自己本位な点がある。市場経済の中では、まず市場の需要状態を把握すること、そしてその需要を充足すること、もし需要がなければ、需要を喚起するか、新市場を開拓することである。これは、マーケティングの基本である。

33) 李大雁、「現代中国における消費様式の実態(1985-2000年)と予測」
明治大学経営論集、第36巻、第3・4合併号、157-172頁

34) 上村幸治、「中国路地裏物語——中国経済の光と影」
岩波新書、1999年、20-21頁

発展から残された農村部

「中国計画白書、1998年度版」によれば、³⁵⁾ 中国の都市部における家電製品の保有率は、1997年末で、カラーテレビが98%、冷蔵庫が88%、洗濯機が87%。また温水器、炊飯器、カメラなど、約60%の保有率を示している。

表6. の中国全体の所有率のデータ（中国経済週報、'98）と比較して検討すると、都市部の発展ぶりが、よく理解される。

このように高い普及率は、80年代の中頃までは、全く予想のつかないパーセントであった。先進諸国が、中国を潜在性のある貴重な市場として高く評価し、海外から強い関心が寄せられるのも当然である。つまり中国国民の購買力の増加に、注目されてきている。

冷蔵庫を例とした場合、大都市は全て全国平均を上回る保有率がみられる。中でも、北京、上海の100世帯当たりの冷蔵庫保有率は、100台を超え、1世帯当たり1台以上の保有を示している。天津市でさえ、100世帯当たり、98.2台である。

このような高い普及率は、農村部と比較して、きわめて対照的である。つまり、いかに農村部の生活水準が低く、表3. で理解されるように、地域によってはラジオや自転車と言った彼らにとって生活必需品とも言うべき商品すら所持していないのかである。あるいは、家電製品を購入しても、家庭にまだ電気が導入されていない地域の多いことである。あるいは、洗濯機の所有率が低いと言っても、チベットのような高地では、水量の豊富な平野部と同じ考えで処理することはできない。

中国では、「生産がなければ消費がないことは、誰もが分かるが、消費がなければ、生産のないことを知らないものが多い」と言われる。つまり消費の活性化こそ、生産性向上も意味をもち、同時に雇用促進にも繋がるのが、徐々に理解されてきた。

また、農民も都市部より農産物を買付けにくる仲介業者の注文、取引を通しての情報も、金銭に対する欲望を掻き立て、農民に事業化の促進要因となってきた。そのため、「戸口登記条例」も形骸化して、農村から若者が職を求めて、大量に都市部へ流れて行く。耕地の少ない山間部の青年にとって、街で働くことにより、高所得を得て、豊かな生活を追求しようとする「盲流」も自然の流れである。ただ1984年末のこととは言え、湖南省の山村を取材した人民日報の記者は、村民は、一枚の服を何年も着用し、ボロボロになった状態を見て驚く。寝るための布団もなく、藁の中で寝て、米飯も口にすることがない、と言う悲惨な生活をルポしている。³⁶⁾ また中国の経済学者、薛暮橋は、「上海など大都市とチベット、青海省など僻地の生活レベルとでは、数世紀の開きがある」と述べている。

³⁶⁾ われわれは、先に3人の事例を取上げたが、彼らはまずラジオを購入した。そして、ラジオを通しての生活改善、情報による生活水準の向上が評価されている。

35) 「中国計画白書、98年度版」、アジア総合開発(株)、295頁

36) 浅川健次、「豊小平新時代」、有斐閣、1983年、57頁

例えば、国家統計局の都市と農村の比較データによれば、³⁷⁾ 白黒テレビの普及は、都市では10人に一人の割合で保有されているが、農村では0.1台に過ぎないと、実証している。カラーテレビに至っては、この差はさらに大きいものになる。一部の農民には、郷鎮企業への移行により、収入を増大させている者もいるが、中国では大半が農村地帯、山間地帯と言うことで、立地条件の悪さから、現在も厳しい経済状態に置かれた状態にある。

気象条件の厳しさの上に、交通網の不備、さらに通信機器などの不備で、それが全生活にまで、悪影響を及ぼしている。

特に、基本的な文化、教育程度に、大きな差がある。北京、上海などの大都市では、文盲率は15-17%であるのに対して、青海省、甘粛省などの遠隔地では、47-48%に達している。³⁸⁾ 貧しさのため、既に児童期から労働に従事して、教育を受ける機会を失ったためである。

ここで政府主導型とは言え、基本的なインフラの整備とどの地域に生活しようとも、雇用機会に恵まれる産業の振興と情報、サービス、物資の円滑な流通ルートの開発により、生活の平準化を実現することが望まれる。あるいは、すべて中国国民が、平等に教育を受ける機会の実現こそ急務かと思われる。

つぎの標的は、住宅かクルマか

確かに、改革開放後の経済発展は、中国国民にとって過去にない豊かな生活を生み出した。所得も、50年代、60年代、そして現在まで、その推移をみれば、いかに着実に向上しているかが理解される。一部には、既に裕福な地域、裕福な階層を現出させている。生活観も、近代化、個性化して、伝統的な部分が、消失しているのも事実である。先述のように、家電製品の普及は、それを設置する、あるいは収納する住宅へ、当然のことながら関心が向けられて行く。つまり家電製品には、住宅との高い相関関係がみられるためである。住宅は、富裕な地域の豪華な住宅を見聞したり、マスコミを通して夢見たり、現実に豪華な家電製品を所有すると、それを設置するマイホームへの夢が膨らんでくる。

逆に、住宅が整備されれば、必ずその生活空間での設備、器具の充実が問題になる。

その点、現在の中国国民にとって、ある程度の耐久消費財が充実してきたため、つぎに住宅への強い購買意欲がみられたとしても、当然である。³⁹⁾ そのため都市生活者のタンス預金は、金融制度の整備により、銀行へ住宅購入資金のために貯蓄され始めたと言う。

中国政府も、1997年4月20日に、「個人住宅ローン管理試行規則」を制定、さらに金融機関が、一般の人びとに住宅を購入できるよう「住宅ローン」制度の設置をした。

37) 「中国経済週刊」, 中国新聞社経済部, 1998年3月26日, 5頁

38) 国家統計局, 「中国統計年鑑, 1983年度版」, 中国統計出版社, 508頁

39) 同上書, 「中国統計年鑑, 1983年度版」, 中国統計出版社, 94頁

この動きは、中国全土に広がりつつあり、現在「個人向抵当権付き住宅ローン」の実施地域を35都市にまで拡大している。今後は、ますます中、低所得層にも、マイホームが得られるよう条件の緩和がのぞまれるところである。⁴⁰⁾

1998年から、山東省は給与の25-30%は住宅購入のための補助費として支給、広東省も毎月230-950元の住宅購入のための補助費を支給するようになる。⁴¹⁾

ただ住宅の建設に当たり、緑地、道路、公共施設などの配置が強くのぞまれる問題である。また地域の清掃、犯罪防止、老後の介護、駐車問題など、住宅の建設に際して、予期しない問題の発生が考えられる。先進諸国の事情を参考に、より優れた街づくりへ、地域の人びとの連帯により解決していくことの重要性とそのための住宅群の構成が必要と思われる。しかし富裕層の中には、購入した住宅さえも投機の対象にするところがある。真に住宅に恵まれない一般庶民に提供するよう、賢明な規制が必要のように思われる。

ここで中国国民の強いニーズは、住宅に次いでクルマであることが、明確になってきた。確かに広大な土地、不十分な交通機関などを考えれば、住宅に次ぐ、「標的」としてクルマが登場して来るのは理解される。道路は十分整備されていなくても、華々しい展示場のクルマに群がる人びとの関心は、欧米の人びと以上に強いものが見られる。

80年代までは、中国は国産車「紅旗」を開発、政府の首脳部が利用していた。そのため個人所有ではなく、国家の所有と言うほうが的確であった。あるいは大組織の幹部の専用に、開発されたクルマでもある。しかし経済の発展と共に、一部地域、一部の個人が裕福になるにつれて、クルマも耐久消費財の中に組み込まれ、90年代に入って、クルマの個人所有が見られるようになる。外資系企業が中国に進出して、工場を建設、量産を開始することになり、生産コストの低下はますます中国国民の身近な存在として意識されるようになる。また中国自身も国家の威信に賭けて、クルマが開発されている。

クルマは、いかに自転車が生活に密着した貴重な存在であっても、またスピーディーなオートバイを所有していても、中国国民の間におけるクルマの期待や評価は高い。ただ、クルマの無制限な生産と販売は、中国においては大きな社会問題を引き起こす可能性がある。⁴²⁾理由は、所有はむしろ大都市に集中することが予測されているためである。交通渋滞、駐車場、排気ガス、さらにガソリンの供給など、社会的に解決しなければならない問題が山積して発生すると思われる。特に、交通ルールを厳守しない市民に対して、運転手のマナーの悪さも加えて、交通事故の多発が予想される。

巨大な数の消費者に対応するだけの個人向けクルマの生産は、環境汚染、環境破壊の問題を生み出し、中国だけの問題でなくなるのは事実である。しかし人びとのクルマへの限り無い欲求は、外資系企業の巧みな戦略によって、容易に抑制できないのは確かである。そのため、どう規制するかである。

40) 「中国経済週刊」、中国新聞社経済部、1998年3月26日付、5-6頁

41) 「中国経済週刊」、中国新聞社経済部、1998年4月23日付、19頁

「健全な消費観」の徹底

情報を十分把握していない人びとの大群は、何か事件が発生すると、混乱する傾向がある。このことは消費行動や消費生活においても、指摘されている。特に、長年にわたり耐乏生活を強いられてきた人びとにとって、必要な商品、便利な商品、貴重な商品、珍しい商品など、販売されると聞くと、激しい濁流のように、一斉にわれ先へと入手しようとする傾向がある。1988年の時は、中国ではテレビ、扇風機、洗濯機などに対して、異常な過熱ブームが巻き起こった。電気の未だ通じていない地域の人びとも、また返品で使用不能の製品でも、また製品の操作方法さえ知らないにも拘らず、購買して家の中に放置した状態で、置かれていたこともある。⁴²⁾

ここで問題になることは、消費された廃棄、ゴミなどの処理の問題である。特に、都市部において、ゴミや廃棄物の処理を、今後どうするかである。先進国から設備、機械、さらには管理システムに至るまで、迅速に導入、徹底して整備する必要がある。

最近では、大量の化学肥料の使用のため、耕地が変質し、特定の農作物の栽培にも適さない事態にあると評されている。中国はかつては、非衛生的と評価されてきたものの、有機栽培には長い歴史、蓄積された生活の知恵がある。先進国のゴミの焼却に関心を示すだけでなく、独自の解決方法の開発を期待したいものである。

ただ関満博が紹介するように、⁴³⁾ 中国の愛昂電子は、廃棄処分された部品を、他の製品化に活用して、経費の削減のみならず、結果的に新製品の開発に役立っている事例を、説明している。不足分を、絶えず廃棄した物品から補給していく生産体制の考えは、重要である。大量に排出されるゴミを、どう再利用、再活用するかの方法の開発である。

しかしながら、市場経済の波は、過去の計画経済と異にしているため、人びとが適応するには時間を要すると思われる。生活意識にマイナスの歪みをも垂らさないよう、また開放された以上は、中国国民全員が一斉に豊かな生活の実現を目指して当然である。しかしその結果、若い人びとを拝金主義に陥らせ、モラルの低下が憂慮されることになる。

1981年2月25日には、中国全国総工会、共産主義青年団などの9団体がモラル向上のために、つぎのような「五講四美」の綱領が提唱された。⁴⁵⁾

五講とは、・文明（節度ある状態）、礼貌（礼儀）、衛生、秩序、道徳である。

四美とは、心霊美（豊かな情操を身に付け、共産党の指導と社会主義制度を守る）、
語言美（礼儀正しい言葉づかい）、行為美（人民に役立つ人材になる）、
環境美（自己、家庭、職場の衛生に気をつける）である。

以上、9つの基本的な態度を重視することにより、中国人民の精神文明の確立を目指す、

42) 「中国経済週刊」、中国新聞社経済部、1998年3月5日付、3頁

43) 横田澄司、「中国における消費財市場の＜消費低迷現象＞の検討」（1991年）

明治大学経営論集、第39巻、第1号、17-38頁

べきことを、訴えている。結果的には、広大な土地、莫大な人口、不完全な交通通信、さらには人びとの貧困との闘う毎日の生活に、上記の倫理綱領は、徹底せずに終わったが、今でこそ、これら消費観に関係した考えは重要と思われる。つまり、節度ある消費生活の徹底である。中国は巨大であるだけに、限りある資源の浪費は、いかなる理由があろうとも避けなければならない。

本研究では、三名の事例から、理解されたことは

50年代は、新婚時代でもあり、薄給の中、不満も感じず机と筆筒で生活をした。

つまり食えることと働くことだけの貧困の中での生活を余儀なくされた。

60年代は、誰もが自転車を必要とし、労働に欠かすことのできない用具と考えた。

つまり移動と運搬用に、唯一、貴重な耐久消費財であった。

70年代は、文革の渦の中に、多くの人びとはラジオにより情報収集して生活をした。

しかし女性は、ミシンの入手を望み、それで家族の衣服を加工した。

80年代は、都市部の約半数、テレビ、洗濯機、冷蔵庫を所有するようになった。

しかし逆に、農村部との格差を生み出すことになる。

90年代は、所得が上昇、それに関連して住宅、クルマに関心をもつようになる。

しかし人びとは自然破壊、環境汚染に敏感になる。

今後、耐久消費財への追求、充足は、どのような社会問題を生み出し、それがどのようなプラス面とマイナス面の影響を与えるかについて、監視の目を注がねばならない。

44) 関満博, 「アジア新時代の日本企業 —— 中国に展開する雄飛型企業」

中公新書, 1999年, 12-13頁

45) 中野謙二, 「キーワードで見る中国50年」, 大修館書店, 1999年,

132頁

謝辞：本研究は、筆者が名古屋市立大学経済学部にて在職中、同大学付属経済研究所より研究助成金（平成10年度）を受け、その資金により行われた。記して、心から謝辞を述べる。